

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# ライバルであり、同志であり、 高い目標であるその背中を追う

静岡県・私立磐田東高校 小泉孝秀

生徒であれ教師であれ、自ら学ぼうとする時、支え合う仲間の存在は重要だ。励まし合い、時に「負けたくない」と敵愾心を燃やす。同志と競い合う中で自分を高め、今なおその背中を追い続けているという小泉先生が振り返る。

## あの先生を上回りたい



磐田東高校の理科教師として採用されたのは、大学卒業直

後の26年前のことです。そして同校での2年目、石川佳彦先生が埼玉県の私立高校から転任してきました。

石川先生と私は、年こそ一つしか違いませんが、指導スタイル、そして力量はずいぶん異なりました。石川先生は生徒に対して「ダメなものダメ」と厳しく、丁寧に指導していましたが、生徒たちは石川先生のご敬遠などせず、それぞれ石川先生の一挙手一投足を話題にするほどで、心から慕って

ることが伝わってきました。また、本校は当時、就職志望の女子生徒が多かったのですが、石川先生のもとには多くの女子生徒が数学の質問をしに足を運んでいました。同じ理系教科担任として素直にすごいと思

たし、石川先生が初代特進クラスを担当を任されたことも、当然だと思いました。

だからこそ、石川先生と自分はどこが違うのか考えました。石川先生の指導に「自分ならそうはしない」と思うところもありましたが、成果を上げているのは確かなのですから、「自分とはスタイルが違う」という理由で目を背け続けるわけにはいきません。石川先生から多くを盗み、その上でもっと良いやり

方、自分が納得できる指導を考え、そして先生を上回る成果を上げたい……そんな気持ち次第に高まってきました。

## 2人の力を合わせた

そういう意味では、私は石川先生と張り合っていたのかもできません。事実、私が特進クラスの担任として卒業生を送り出した時に、進学主任だった石川先生が、「自分と違うやり方でもこれだけの結果が出せることを教えてもらった」と言ってくれたことがあります。石川先生も私のライバル心を早くから分かっていたのでしょう。

そんな関係にも変化が訪れました。それは石川先生と出会って10年以上が経ったころ、進路

課長の石川先生と進学主任の私が、全教員のよりどころとなるような進学指導シラバスの作成を校長から命じられたことがきっかけです。しかし、特進クラスで成果を上げていたとはいえ、30代半ばの私たちに、全クラスに通じる確固たるノウハウがあったわけはありません。

結局私たち2人に出来ることは、これまでやってきた指導をすべて洗い出し、それをみんなに知ってもらうことでした。

1年余りの時間をかけて作成したシラバスですが、「こんな分厚い本は誰も読まない」と差し戻されてしまいました。2人ががっかりしていたところ、あるベテラン教師が「1学年主任を務めることになったが、進路

## 先輩教師の言葉

ライバルであり、  
同志であり、  
学び合う仲間

静岡県・私立磐田東高校教頭  
石川佳彦



年が近い小泉先生とは赴任直後からよく一緒に飲み

にも行きました。でも、本音をぶつけ合うようになるのは、10年くらい経ってからです。私は生徒の面倒を細かく見るタイプですが、小泉先生は生徒の自立心をうまく引き張り出すタイプ。教師として認め合っているというところもありません。

だから、同じ学年で共に特進クラスの担任を務めたのは、お互いをさらに理解する良い機会でした。私が1年生の時に受け持った生徒を、小泉先生が2年生で担任して、その後難関大に合格させた時は、「私ならあの生徒をここまで育てられたらどうか」と

左 いしかわ・よしひこ 数学科。埼玉県の私立高校を経て、磐田東高校へ。教頭。

右 こいずみ・たかひで 理科。初任以来、磐田東高校に勤務。進路課長。

撮影◎磐田東高校にて



指導に自信がない。シラバスを参考にしたい」と申し出てくれたのです。その先生は、シラバスに沿って3年間学年運営を行い、入試でも素晴らしい結果を出しました。もちろんそれは私たちの自信になりましたし、2人のやり方を融合させて、学校をもっと良くしていきたいという気持ちも芽生えてきました。

生徒を見ていると、誰が始めた指導かなどどうでもよくなりません。成果のあった指導であれば、もしも自分と相容れない部分があっても、そこから学ぶものはきっとあると確信しています。進路課長時代の石川先生は、私を学校訪問によく連れて行ってくれました。他校の取り組みを知ることがとても良い刺激になります。それ以上に、学んだ

ことを自校にどう適応させるかを、学校に戻って石川先生と2つの視点で深めていく時間が一番勉強になりました。私たち教師が何のために勉強するのかといえば、生徒の内面に昨日より一歩深く踏み込むためです。その一歩があつて救われる生徒がいるかもしれないからです。とはいえ、生徒の内面に入っていくのは大変です。だ

からこそ、同じ職場の同僚に学ばなければいけないと思えます。私も、大ベテランの先生にものを尋ねるのは緊張します。でも、それが自分1人で出来る研修、学びなのだと思います。石川先生を目標に出来たこと、そして先生の後を追いつ、進路主任、進路課長を任されたことは、全て自分に与えられた学びのチャンスなのです。

率直に思いました。手を掛けさえすればよいというわけではないのだと、小泉先生から教えられた気がしました。それ以降、小泉先生は私にとって大切なブレインです。

本校が進学指導に力を入れ始めたころ、私と小泉先生は教師用の進学指導シラバスの作成に取り組みました。2人で、知恵を絞りながら、お互いがやってきたことを全部出し切っただけで、とても普遍的な内容にはなっていないかもしれません。しかし、それを契機に、もっと2人で語り合つて、お互いの指導を練り上げていかなければいけないと思ふようになったのです。自分たち中堅の成長が学校全体の成長と一致していることを自覚した時期でもあります。

私と小泉先生は、先輩後輩の関係であり、ライバルであり、そして同志です。生徒を育てていくために、スタイルは違つても、同じ方向を向き、そしてお互いに学び合わなければなりません。勉強しなければならぬことはまだたくさんあります。自分の知らない世界を先輩、同僚から学び、生徒のために生かせることはないか、これからも考え続けていきたいと思えます。

\*プロフィールは2013年3月時点のものです